

ソビエト婦人

1978

11

● 世界を照らす十月の光 ●

● 交流と友情の8日間 ●

つつましやかな女性

私たちの一人一人で国は成る

● 星の光（短編小説） ●

● 小さな闘牛士 ●



● シンデレラ ●

● モスクワ室内オペラ ●



ネアホータ《いやだ》とよばれたカバの話

ライム・ファルハジ

「ネアホータ（いやだ）」は、小さいときからぐずで、のろまなカバでした。にこった水のなかで、うとうと眠っているのが大すきでした。池のそばに友だちがやってきては、よく、よんだものでした。

「カバくん、カバくん、遊びにいこうよ！」ネアホータは、長いこと考えています。やがて、頭をあげると、きまつてこう答えました。

「いやだなあ、どうも……」

そしてまた、しげつたすいそうと落葉におおわれた、あたたかい水のなかにもぐってしまいました。

「いこうよ、遊びに！」ゾウの子、キリンの子、シマウマの子が、もう一度、さそいました。「やしのみをとりに林にいこうよ。とってもおいしいんだぜ！」

なんどもなんどもきそわれて、カバは、のろのろと岸に上がり、のっしのつと、いかにもおつくうそうに、みんなのあとについていきましました。みんなは、高いやしの木をゆすぶって、やしのみをふるいおとしました。カバのじゅんばんがきました。カバは、またもや、とくいの言葉くりかえすのでした。

「いやだなあ、いやだなあ！」

「ちよつと、走ったり、とんだりしてみないかい。きれいな空気をすってさ……」

でも、ネアホータは、くる日もくる日も、にこった池の中で、目をとじて、たいこ腹のカエルの合唱をきいているのでした。

ゾウの子、キリンの子、シマウマの子は、みんな大きくなって、カバの子を遊びにさそいにあまりこなくなりました。「いやだなあ、いやだなあ」という返事をきくのが、いやになったのです。もちろん、カバの子も大きくなりましたが、背はのびないで、でぶになってゆくだけでした。それで、ほとんど、池の中にじつとしていたのです。しらぬまに、頭も、せなかも緑のもでおわれ、草さえ生えてきました。そこで、カエルたちは、カバのせなかにへいきて

とびあがり、合唱するようになりました。

ある日のこと、ゾウの子とキリンの子とシマウマの子が、もういちどカバの子をさそいに池のそばにやってきました。ところが、カバの子がいつも寝ていたところには、ただ、緑の小島があるだけでした。

「おや、へんだな。でも、これ、カバだよ」ゾウの子がそれと感じました。

「ほんとうかな？」キリンの子が、そう言つて、長い首をもつと長くしました。

「そんなことありえないさ」シマウマの子が言いました。「これは、小島だよ」

「そうかしら。じゃみんなでよんでみようよ。カバくん！カバくん！」

でも、なんの返事もありませんでした。

「やっぱり、カバじゃないね」シマウマの子が言いました。

「カバくん、ぼくたちと遊びにいこうよ！」ゾウの子が、ありったけの声をはりました。するとどうでしょう、緑の小島が、かすかにゆれて、返じをしました。

「いやだなあ……」

「これ、なまけ者のカバのなれのはてさ！」友だちは、あきれかえつて向うへ行つてしまいました。

そして今でも、大きな池のそばにいて、大声で、「カバくん、でてこいよ！」と叫ぶと、すこしたつてから、水そうと葉っぱにおおわれて、草の生えた小島が、小さな声で答えるそうです。

「いやだなあ……」

うそだと思つたら、じぶんでそこへ行つて、できるだけ声をはりあげてよんでみなさい。

「カバくん！カバくん！」と。

さしえ V・ブレン

子どものアソビ



ソビエト婦人

原カタログ番号70834

定価160円

